

立原正秋のこと

兵 藤 正之助

今度、新潮社刊の『新潮日本文学アルバム』に、新しく十九巻が追加され、その十八巻目に立原正秋が入り、評論、年譜などのすべてを、思いがけずも担当することとなった。

一日がかり、ある日書庫から、彼の二十四巻本の全集や、生前寄贈された小説・評論・エッセイ集などを机辺に移し変えた。

そしてその後、大正十五年一月六日生れ、昭和五十八年八月十三日、五十四歳で死去した彼の年譜にざっと眼を通しながら、さまざまに感慨にふけた。

昭和三十九年以来、死に近い頃まで、あれこれと彼との交渉があったからだ。

その第一にあげられるのは、昭和三十九年十一月創刊、四十二年九月、十号で終刊となった同人誌「犀」である。「近代文学」の終

刊が予測される中で、山室静や植谷雄高の意図で、それまで集まっていた若い書き手によって刊行が企てられ、立原正秋を中心に創刊されたこの雑誌は、終刊後、時がたつにつれて、文学史的にも珍しいものとして、文学辞典などで特筆評価されるようになっていく。

それは当初無名の新人として集った同人の中から、まず立原が直木賞を、次いで高井有一が芥川賞、そして加賀乙彦の太宰治賞というふうに、続々と作家の輩出していったことで、さらにその後も、後藤明生、佐江兼一、そして芥川賞の岡松和夫と続いたのである。また四名の批評家を生んだこともつけ加えておこう。

彼らの末席につらなつたばくは、「犀」同人になるまでは、およそ二十年ほど、ロマ

ン・ロランというフランスの作家研究をやってきていたので、「犀」に「正宗白鳥論」を九回連載することを機に、日本の近代文学の評論へと変った。その点からも、「犀」は、ばくにとつて意味深いものであった。

雑誌をめぐって、印象に残ることの、一つ二つ書いてみよう。

第一は、雑誌刊行後、追々に同人の中に文学賞候補にノミネートされるものがちらつきはじめたこともあり、時と共に緊張感も高まり、全体の空気は、まことに意気軒昂、酒の度合の高まるにつれて、同人会の席はとかく真剣白刃取りもかくやと思われような場となることがままあった。

立原はなかでも、その急先峰。こと文学に

関し、僅かのことも容赦せず酷評、追究した。ぼくなど、それまでの、とかく甘い文学青年の姿勢は、根もとからゆらいだ。

ところで、ぼくは二十歳代から、ブンガク、ブンガク、と念仏をとなえるみたいにしてきていたので、同人雑誌も何回か経験し、まじわった文学仲間が相当の数に上った。そして彼らの中に、文字通り、文学一筋、生命をかけていた者もいたのは、当然のところだった。

だが、現実には、そうした仲間の中から、一人の人物が、プロの作家としてあざやかに飛び立っていくのを見たのは、立原正秋が最初だった。

「あざやかに」と言ったのは、作品を産む度合いが、徐々に等差級数的に増加していくのは自然であるが、それがある時を境にして、等比級数的に増大して、あれよあれよという間もあらばこそ、次々と小説集が産出されていくのを見たからである。

そしてまた立原の場合は、流行作家の一人となっていたのだから、その「あざやか」さは一きわきわだった。

ちなみに、昭和四十五年六月、「薪金」を角川文庫の一冊として出してから、死の年をこえた昭和五十九年二月、『日本の庭』（新潮

文庫）まで、文庫本だけでも刊行数が五十五点の多きに到っていたことは、そのことをよく物語っている。

その後、前述のように「犀」の旧同人からは、作家が次々と出ていったので、同様の風景はしばしば見るところとなった。

なるほど、作家とはかくして生い立って行くものか、痛感させられた。

立原年譜はさらにもう一つ、ぼくの記憶をあらたに呼び起した。それは彼が編集長をやっていた第七次「早稲田文学」に、ぼくの「野間宏論」を、四十四年十一月から翌年十一月まで、前後十回、約一千枚の評伝の連載を可能にしてくれたことだ。

彼は時には、電話で、「今度のは何枚くらいになるかな」ととき、「あなたのページを確保して、全体の掲載計画をきめるから」とまで言ってくれた。

いま読んでも生硬で拙いあの論稿をと、感佩の気持をあらたにする次第だ。

今年平成四年、八月十二日、その立原の十三回忌の会が、鎌倉の華正楼で開かれた。ぼくはあいにく他用のため出席しなかったが、岡松和夫の「古典と現代」六〇号の「立原正

秋」によると、「立原の文壇登場を支えた大なる事な応援者であった本多秋五氏」や李恢成、旧同人たち、それに立原文学の「愛読者だという吉本ばななさん」も参会、静かに故人について思いをはせるふんいきの良い会であったようだ。

ああ、もう、十三回忌か！

感慨の終りは、この一語につきる。

『文学アルバム』は、まだまだ書きたいものの多くを抱いたまま、無念の死をむかえざるを得なかった彼を中心に、昭和四十年代の文学状況における、他の同人たちとの、まことにユニークな交わりのさまざま書き入れた鎮魂の書にしたいものと、ひそかに考えている次第である。